

# 矜学校の 恃校の

森下  
計二

★ M C G R E G O R ★

文芸社

# 『Boon-gate』のPDF作品を ご覧いただく前に…

## 操作について

- 作品の多くは「もくじ」のページで、進みたいページの項目を押せば、そのページまでジャンプし、また、ジャンプしたページのタイトルを押せば、目次のページに戻るよう設定しております。
- 直前に開いていたページに戻るには、画面上の「◀」ボタンで、直前に開いていたページに戻ります。

## 読み方いろいろ

- 通常は画面の「倍率」が100%前後になっていますが、「倍率」を150%まで高めると文字が読みやすい大きさになります。
- 通常は「見開きページ」で設定されていますが、「単一ページ」にすると読みやすく感じます。
- 読み進めるときは、「十字キー」を使用すると手軽です。
- 「サムネイル機能」を使用して読み進めると、2～3頁からとばし読みするのに便利です。
- 頁を「回転」させることが可能です。地図などを拡大して見るときに便利です。

[http://www.bungeisha.com/PDF\\_is/05-top1.html](http://www.bungeisha.com/PDF_is/05-top1.html) でPDF作品についての説明を致しております。ご参照ください。

# 矜恃学校の の

森下計二

文芸社

【学校】一定の教育目標に従い、教師が児童・生徒・学生に計画的・組織的に教育を施す所。また、その施設。(小学館『大辞泉』)／【の】(格助)所有・所屬の關係をあらわす。(中略)連体修飾語を作るときのことば。(三省堂国語辞典)／【矜恃】(キンシは慣用読み)自分の能力を信じていたく誇り。自負。プライド。「矜持」とも書く。(岩波書店『広辞苑』第五版)

学校の矜持

## もくじ

学校の矜持——まえがきに代えて	9
えんぴつ対談「卒業」	15
仮想水（バーチャルウォーター）	22
五五十、二八十、一九十	25
悔い、ときどき喜び	27
田んぼという磁場	34
子どもたちは象なんです	38
持てる国、ジャパン	42
海は死にますか	46
泣いたピエロ	51
宿題のおかけ	56
作文の名手	63
花いかだ	70
碇星・舵星の彼方へ	75
能動ネコ	82

- 
- みちおしえ 86
- もったいない 93
- 瀬戸 あかねいろ 茜色の島影 95
- 遅れた卒業 102
- 富士参り 109
- きずなをまとう 115
- 子どもを愛するということ 120
- 月下美人 125
- あなたが好き 129
- 少年K 135
- 型と人間 141
- 「遊びをせんとや生まれけむ」  
わたぬき 四月朔日 151
- 上機嫌で生きたい 153
- 夢見月 156

卑怯を憎む心	158
後 <small>あと</small> 看 <small>み</small> 世 <small>よ</small> 蘇 <small>そ</small> 和 <small>わか</small> 歌	161
どうやって守ってくれるの	164
水(自)から学ぶ	167
五輪五体	170
美点凝視と一期一会	172
青い海は好きですか	174
ガービッジ	176
Vサイン	180
声に出して読みたい 和俗童子訓	187
子どもはほめて育てよう	190
あと千回の晩飯	193
いきいき	195
これって、IT革命?	202
I am ーっ student	204

引用・参考文献	237
あつたかい春になりました——あとがきに代えて	232
親父の小言	225
友情	212
おきあ 起上がり小法師	218
あすこそは教育	210
無痛文明	207





## 学校の矜恃——まえがきに代えて

最近の学校には、元気や活力を感じない……。

いや、最近というよりも、かなり前から。私が教員になりしばらくした頃、およそ二十年前くらい前から、学校には明るさやエネルギーをどんどん感じることができないと思うようになってきました。

自分が教員として、子どもたちを担任したり、専科教員として授業をしたりしていた頃の学校の空気と、この頃の雰囲気はかなり違ってきていると思うのです。小学校の校長になって十年を超え、その前の教頭時代六年間を加えると、長い間子どもたちを直接担任していない時間が続いてきました。そのために、教室の中で子どもたちと直じかに触れ合うことが少ないから、余計そう感じる……という理由もあるかもしれませんが、それだけではな  
い変化が起こっています。子どもたちを取り囲む社会・文明は、もはや最悪と言うしかな  
いし、そこへ性急に健全な活力を求めること自体が逆効果をまねきかねないのです。

そしてまた、その変化は、子どもたちの間に起きているばかりではありません。教師一人ひとりも、教頭（副校長）や校長を含めてすっかり元気を失っているように見えます。

学校には、今、その主人公である子どもたちに対しても、教師に対しても、管理職に対しても、「元気を失わせる力」が大きく作用しています。その力のもとでは、もちろん一つではありません。文科省も、地方教育行政も、マスコミも、保護者や地域の人たちも、つまるところ学校や教員をだれも信頼も尊敬もしていません。ひらたく言うと、「校長や先生なんかただの人」で、先生と呼ばれるほど偉くない……と思っっているのです。そして、その位置から、まるで世相のうさん臭さの、うさばらしに似た圧力を「教育」の名を借りてかけてきているようにさえ感じられます。

最近のマスコミの話題だけ拾ってみても、やれ「ゆとり教育の破綻」とか、「低学力問題」とか、「学級崩壊」「校内暴力」「指導力不足教員」「いじめ・不登校」「不審者対応」……とか、あたかもそれら全ての事件・問題の責任や理由が、教員や学校にあるかのような言説が、あちこちに見られます。その結果として、国や地方の行政改革が、国庫の教育費の削減や教育関係法や条例の改正などに向かい、教員に業績評価をするなどさまざまなしめつけをおこなってきました。そしてそれは、教員の組合活動そのものにも大きな制限を加え、教員・学校の総体に結果的に元気を失わせる圧力になってきました。

私自身は、組合活動の経験もないし、その主張に賛同したこともなければ、魅力を感じたこともありません。管理職になる以前からも、組合の薄っぺらな理屈には抵抗感さえ持

っていました。しかし、組合員教師たちの、たとえ烏合の衆的で日常的で情緒的な活力でも、ないよりはましでした。また、組合を支援する教育学者や教育評論家、また数は多くなかったのですが、優れた教育実践を続ける教師たちや校長もその流れに参加していましたので、授業のことや担任としての交流で職員室は活発になる背景がありました。その頃の学校は、子どもたちをめぐって、授業をめぐって結構話題が多かったし、学校の内外に研究のサークル活動も多くあつて教師間にさかんな研究討議をする機会もしばしばあつたのです。また、世間的にも「先生」を大事にする空気が、まだまだありました。その結果、けっこう元気な雰囲気毎日を送ることができていました。

学校に元気がない。はたして、そんなことでいいのでしょうか。これでは、子どもたちが元気になるはずがありません。私は、ずっとそう思ってきました。

元気で明るい子どもたちがいて、その真ん中には、やはり元気で明るく賢い先生たちがいて、その周りには子どもたちを励ます保護者や地域の人たちがいる、そして、子どもたちは、毎日しっかりと学習したり、楽しく遊んだりしているというように、学校は、そうでなくてはならないのです。時代性を無視した牧歌的な理想論で、情緒的かもしれませんが、そう思っています。

そして、こう思うのは、何も私ばかりではないでしょう。

大好きで尊敬のできる先生と、いたずらもするが明るくて楽しい友だちがいっぱいいて、自分たちを愛して、大事に思い、温もりのある家庭には保護者がいる、地域の人たちは、先生方を尊敬し、学校に畏敬の念を持ち、おらが学校を愛してくれる、という環境はなんとともでも、昔あった姿で、すばらしいことでしょう。

学校はあるべき「矜持」を取り戻すべきではないでしょうか。

「戦後、祖国への誇りや自信を失うように教育され、すっかり足腰の弱っていた日本人は、世界に誇るべき我が国古来の『情緒と形』をあっさり忘れ、市場経済に代表される、欧米の『論理と合理』に身を売ってしまったのです」（『国家の品格』藤原正彦、新潮新書）

今の日本に必要なのは、論理よりも情緒、民主主義よりも武士道精神であり、国家の品格を取り戻すことであると、藤原氏は言っています。武士道精神のことまでは、私にはわかりませんが、学校には「情緒と形」が必要だということは、言うまでもないでしょう。学校は「情操を育て、基礎的・基本的な形を学ぶ」ところなのです。国家に品格、学校に「矜持」「元気」を取り戻したいものです。

ここに集めた文章は、私が校長として勤務した（勤務中を含めて）三つの学校の「学校だより」に書いたものばかりです。「子どもに関わる者として誇りをいただき、教育に関わ

り働くことに自負を持ち、心を込めて学校から保護者や地域に発信する」、というその信念だけは貫いて書けたような気がします。そもそもが「学校だより」なので、同じ話をくり返した文や紋切り型の挨拶文もそのまま削らずに収録しました。退屈に感じられたら読み飛ばしてもらってもかまいません。また、執筆の年月や学校を特定することも避けました。事実を紹介することよりも、考えを読んでほしかったからです。

定年を数年前にして、健康を崩すことが続きました。本当は、退職後時間の余裕ができてから出す予定でしたが、だいぶ早まってしまいました。言うほど立派ではない矜恃や元氣なき校長の雑多な学校論になったかもしれません。

二〇〇七年一月

森下 計二





## えんぴつ対談「卒業」

T ちいちゃん、えんぴつ対談しよっか？

C うん……

T ちいちゃん、もうすぐ卒業だね。おめでどう。

C うん。

T この六年間、いろんなことがあったね。何が一番楽しかった？

C 日光（六年生の移動教室のこと）。

T それだけ？

C（しばらくして）うん。

もう二十年近く前の、ある記録が見つかりました。私の本棚の古いファイルの中から。「えんぴつ対談」。これは、教師と子どもが、二人でできるだけ口をきかないで、一枚の紙と鉛筆の文字だけで対話する方法です。作文が苦手な子や、話しかけても黙ってしまう

子などとやります。

一枚の紙を交互にやりとりして、問いと答えを書き合います（Tは教師、Cはこの時は私で、Cは子ども）。この時はちいちゃんです。TとかCは対談中は書きませんが、後で整理して書きます）。

T ちいちゃん、学校では、先生、ちいちゃんの声、もう、ずーっと聞いたことがないだよね。

C うん。

T 聞きたいんだけど。卒業までに。

C うん。

T 卒業式には、ぜひみんなの前で一言、言ってほしいんだけど。

C うん。

T 「私の夢は……」ちいちゃんは、保母さんになりたいんだったよね。みんな一人ずつ言うんだけど、言えるかな？。

C (答えない)

子どもの発達の遅れの一つに、「場面緘黙症<sup>かんもく</sup>」というのがあります。私が担任した「ちいちゃん」（もちろん仮名です）は、家では誰とでも話せるし、近所で遊ぶ時は同じクラスの友だちとでも平気でした。でも学校では、授業中はもちろん、ふだんにおもしろいことがあってもほほ笑むのがやつとで、笑い声さえ聞かせてくれません。六年生になって、入学以来、卒業式まであと一月<sup>ひとつき</sup>となっても、学校では一度も話したことのない子でした（私と話したのは、家庭訪問の時に数回の言葉のやりとりくらいです）。

だから、ちいちゃんと話をするのは、「えんぴつ対談」だけ。

T りょうちゃん（ちいちゃんの仲良し）と二人だったら言える？

C （少し表情が和らいだが、答えない）

相手の答えがない時は、紙をもどして、こちらの問いを続けます。でも、この日ちいちゃんは、それ以上何も書いてくれませんでした。

しばらくして卒業式の当日がきました。ちいちゃんは、卒業証書を校長先生から受け取って、一言、胸を張って言う「私の夢」が、練習の間、何回やっても言えませんでした。やむなく、私が、「ちいちゃんは、子どもが大好きなので、将来保母さんになりたいそう

です」と代弁するようになっていました。

私の担任のクラスの番が来て、順に子どもたちの「呼名<sup>こめい</sup>」をして、一人ずつ証書をもらって一言意見発表。そして次の子の「呼名」……を繰り返していききました。

ちいちゃんの番が来て、彼女を呼び、カチカチになっっておどおどと証書を受け取りに進む姿に、私は、ハラハラしながら「今日も無理だな……」と思いました。証書を持ったちいちゃんが、真ん中にもどって、おずおずと立ち止まりました。

一瞬、場内の空気が凍りついたように、時間も、ざわめきも消えました。同じクラスの仲間も、卒業生みんなが、いや会場の全体が、ちいちゃんの声を期待しているかのように静まりかえったのです。

ダメだ、私が代弁しよう……とマイクに近付いたその時です。

「私は……、小学校の時、一回も話しませんでした……」

ちいちゃんの小さな声でした。会場のみんなも、私も、驚いてじっとちいちゃんを見ました。

「……でも、中学校に行ったら、みんなと話します。そして……」

まだ、ちいちゃんの発言が終わらないうちに、卒業生たちの席から、喚声と拍手が起こり、それはすぐ会場に鳴り響くように広がりました。ちいちゃんは、はにかみながら席に

もどり、それからとどこおりなく式は進み、無事終了しました。卒業生と保護者に教室で最後の話をし、校庭で何回か記念のスナップを撮ってもらったり、在校生たちで送り出して、私は校門のところまで一人ひとりと握手して別れました。その間、気が抜けて何が起ったのかわからないうちに、気が付くと校門のそばにいたのです。

「ジンターン！」（私のニックネームの一つ。「森下仁丹」じんたんから付けられた）

通学路を去っていく卒業生や保護者たちの群れの中から、私を呼ぶ大きな声が聞こえました。返事をしながら顧みると、りょうちゃんと、ちいちゃんとそのお母さんたちでした。

「ジンターン！ さようなら！ ありがとう……」

それは、ちいちゃんの声でした。まぎれもなく、ちいちゃんのお母さんが深々とお辞儀をしている側で、腕を組んでいたちいちゃんが、こちらに向かって大きく手をふっていました。

「ちいちゃん！ よかったなー！ げんきでなー！」

私も、応えて大きくバンザイをするように手をふりました。

（全くさんざん心配させやがって、土壇場にきて、あんなこととして、びっくりさせられたぜ、あんちくしょー……）  
と思いつつ、でも本当に良かった。

その後しばらくして、学級担任をすることもなくなり、「えんぴつ対談」をすることも忘れてしまっていました。ちいちゃんと対談した、こんな記録がファイルに残っていることすら、これまで思い出しませんでした。

本校の六年生の卒業式に、子どもたちに渡す卒業証書を書いたり、式辞のことを思い出したりしている内に、ふと手にしたのがこのファイルです。何気なく自分が卒業生を出した頃は、どんなことがあったのか、あれこれ思い出していた時のことでした。

大人になって、振り返ってみれば、小学校の卒業式など大した意味を持たないことが多いでしょう。しかし、長年教職にある私たちには、実に数多くのドラマが思い出として残っています。すでに大人になった、そうした子どもたちも、たまには思い出したりしてくれることだろうと思います。

小学校の六年間に、子どもたちは大きく成長します。ひらがなもろくに書けなかったのに、しっかりした作文が書けるようになったり、お風呂で掛け算の九九を暗唱したりしていた子が、難しい数式や文章題を解くようになるのです。五十メートルを走るのに、くねくねと曲がって走っていたのに、サッカーや野球選手として試合に出たりするようになるのです。考えてみれば、小学校の六年間ほど、大きな成長や変化をどの子にももたらす

「場」は、ほかにはないかもしれません。

小学校の教師にとつて、卒業式とは重い意味を持っていると感じます。時代が変わり、子ども気質も変化してきたとは言うものの、教師にとつてはやはり「教え子」です。担任したり、授業や学校の様々な場面で関わって、ひたむきな愛情を傾けて六年間を見守るのです。時には腹をたてたり、憎ったらしいと思うことはあっても、たいてい卒業式には、すっかり忘れてしまいます。「先生、お世話になりました」なんて一人前の言葉など言われると、もうなにもかも「許しちゃう」なんてところですよ。さんざんてこずらせるようなことをした子でも……。

あのちいちゃんは、今、エアロビクスのインストラクターをやめて、結婚して、おしゃべり母さんになったそうです。



## 仮想水（バーチャルウォーター）

この五月は、雨が多かった。

下旬の運動会に向けての子どもたちの練習も、しばしば雨にたたられていました。全校での開会式や閉会式の練習も、結局校庭では一度もできないほどでした。

そのため、子どもたちの演技や競技の練習不足はいなめず、本番で興奮しすぎて怪我をすることや、思わぬトラブルが心配されました。しかし、さすがに天も味方したのか、運動会当日は雨も降らず、少し涼しいくらいの朝で、スポーツをするにはむしろ快適な天候になりました。

そんな中、それぞれの子どもたちが精一杯の活躍をして、またたくさんの保護者の皆さんや地域の方々の応援を得て、盛況の内にとどこおりなく終えることができました。この運動会の陰で、交通安全協会の皆様をはじめ、様々な地域の方々に支援をいただいたことは一言では言い尽くせません。本当に有り難い思いで一杯です。天の味方はその手厚い支援の賜物でしょう。心からお礼を申し上げます。

運動会が終わってからも雨は続いて、今年度二度目の全校朝会での「校長の話」も結局

放送でおこなったほどでした。五月雨は陰暦の五月だから、梅雨と同義らしいけれど、このまま六月の長雨に入ってしまった、今年さつきは五月晴れは十分味わえないままになってしまうことになりそうです。

これだけ雨があれば、今年の夏は水不足の心配はないなと思っていたら、どこから電力不足の話題が聞こえてきました。電力会社の原発が稼働していないからだというのです。週刊誌などでは、大停電が予想されると騒がれています。いくら水があり余っても、それをポンプで運ぶのだから、電力がストップすれば、蛇口からは水は出ないことになるのです。

そんな心配をしていたら、ラジオでこんな話題を聞きました。

「日本が水に恵まれた国であるというのは、本当は少し違うというのだ。それは、日本は実は膨大な水の輸入国である」と言う話。しかもそれは、ミネラルウォーターなどの飲料水ではなく、食品、すなわち農業の産物や肉類、魚介類に含まれている水分のことで、見掛けは水ではないのです。原産地で大量の水を使用して生産される製品の中の水であるという。食料の自給率が先進国の中で最低の日本は、食料の大量輸入国であり、外国の大切な水を大量に消費しているのと同じだということなのです。

このような食料などに含まれている水を、「パーチャルウォーター 仮想水」と言うそうです。

子どもたちを学校で育てるのを、「根を培つちかう」などと植物の育成にたとえることがあります。してみると、日々の私たちの子どもたちに対する言葉掛けなどの営みで生まれるのは、「仮想水」のようなものなのです。

よもやおろそかにはできないと言うことでしよう。



## 五五十、二八十、一九十

タイトルの「五五十……」の言葉に触れたのは、ごく最近です。九九の歌ではないが、合わせて十になる、それだけの意味なのです。

しかし、この言葉よく考えてみれば含蓄があります。

「十分」という言葉が示すように、「十」には、全体とか、満点といった意味があります。大きな満点でないが、小テストなら満点なのです。

たとえば、人間関係。お互い、五ずつの互角の付き合いなら、相手が五なら自分も五の対応をすれば良い。五の力、五のおもいやり、五の愛情、五の指導、五の協力、五の反発……。お互いが、お互いを支え合うのです。

相手が二なら、こちらは八。相手が一なら九。自分の努力の見せ所であり面目躍如の舞台です。合わせて十になるよう頑張る時なのです。

これを授業で考えてみましょう。子どもたちは、一人ひとり違う。能力も違えば興味や関心も違う。その日の体調も、一人ひとり違うでしょう。精神状態も違えば、いつも同じ気分でないこともないでしょう。いつもは五の子どもが、今日は二であったり、一であつ

たりするのは。当然、六以上の時だってあれば、すでに十の子どもだっているはずです。その一人ひとりに合わせて、十の理解、十の興味や関心を生み出す。そして、学級全体に日々展開していく。それが、プロである教師の仕事なのです。

学級の子ども個々の姿をとらえ、一人ひとりにふさわしい物を準備して、授業の中で与え、一人ひとりが毎日十になるようにするのが理想であり、我々の目標なのです。

「グッド イナフ マザー」という言葉で、母親のあるべき姿を語った心理学者がいます。直訳すると、「ほどほどに十分なお母さん」です。親というのは、ついついわが子に対して完璧を求めたり、自分も気張って完全な理想的な父母であろうとしたりします。しかしそれでは、子どもも、親もいつか疲れてしまい、パンクしてしまいます。だから、結構ドジな失敗も、いい加減なところもあるお母さんだよ、という意味なのです。もちろん、その度が過ぎるのは問題ですが、適度に十分であることは、特に子育てには必要なことなのです。

私は、教師も「グッド イナフ」である方がいいと思っています。そうした余裕が、むしろ授業や指導に活力を生むからです。家庭訪問も終わりましたが、学校と保護者の関係も十でありたい、「グッド イナフ」であってほしい。そうお願いしたいと思います。

# 途中省略

本編はダウンロード時間短縮のため省略版でお届けしています。  
途中省略なしの完全版をご希望の方は製品版をご「購読」ください。

## 著者プロフィール

### 森下 計二 (もりした けいじ)

東京都の小学校長。

1948年兵庫県に生れる。

教頭、校長として八丈島に単身赴任をした折、エッセイ集『八丈の酔醒草』（私家版）を出す。

## 学校の矜持

---

2007年2月15日 電子出版発行

著 者 森下 計二

発行者 瓜谷 綱延

発行所 株式会社文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1

電話 03-5369-3060（編集）

03-5369-2299（販売）

<http://www.boon-gate.com>

© Keiji Morishita 2007 Corded in Japan

ISBN4-286-02319-2

JASRAC 出0612240-601

（文芸社発行の通常書籍（紙の本）については、全国書店でお尋ねいただくか、「文芸社ON-LINE」サイト、<http://www.bungeisha.co.jp>を御参照ください。）